

他者への価値実現期待主義 (期待価値実現主義)心性について

松 野 憲 二

はじめに：近代合理主義精神は、現代への移行過程で原理を理性から知性に転換した。理性が自らの本質である自己陶冶の原動力を疎外すれば、急展開する技術文明状況の中でその能力は外的世界に吸収されて、次第に外界理解能力の知性へと変質する。我々の関心事は、生活保障条件である外的世界と自己の生体一般的自己実現欲求との相関の問題に成る。内的規範であった自然法は対象世界を実利に運動せしめようとする、自覚への実態である即自態的な個人人間性を拠り所とした自然権に座を明け渡した。価値観は多様化の名目の下に、即自態的な実態多数派自我の自己正当化の手段である「価値感」になった。自覚性が低下した「価値感」の自己主張は、他者への価値実現期待主義に自己を正当化し、倫理は他者問題と成り、近代以降の学校化社会は、このような心性状況を加速している。

ヒトの種の本来性である実践理性の復権を期すべく考究した。

実態自我意識の自己評価機能：価値はもともと個体の欲求に始まる。欲求の志向性が価値意識の原理である。欲求対象の性質、欲求を充足するものの性質が価値として意識されるが、対象の性質に反応する欲求の性質自体に、自覚存在ヒトの価値の拠り所がある。自己への意識に自覚存在の価値が成立する。価値の性質は自分自身の欲求の性質である。

生体一般な欲求の志向性に因って、好悪で対象を選別する生体本来の価値意識は、直接態として成立する。生体自然な、即自に自己肯定態であり常に外界に向かう欲求の性質自体には、自体を評価する機能は伴われていない。欲求自体が充足され実現されることを意図した時に功利の意識から、価値意識は脱自して対象において活性化し自分を対象とする。自分の個別的欲求が、非我の性質の普遍性つまり状況内存在としての同一性において充足されることを認知すれば、直接態価値意識は、欲求対象に基づき普遍性に拠り所を得て向自に自分の欲求自体を評価の対象とするように成る。充足結果展望からの、向自の意識が活性度を高めれば、欲求充足を求める生体自然な即自意識現象価値意識の対象への指向の性質が、普遍性に基づいた自己への意識に受け取られ、対自な評価意識の対象と成る。言わば、普遍的对象が欲求の質を評価するように成る。

自分への評価意識は、本来、世界内に実存する自己に実在を求め、自覚・自律・自己形成・自己実現へと運動する、本質的評価能力の理性の機能である。自己への指向性に、実在を求め得られたものの実践を意図するのが理性の欲求である。理性欲求は、実在への志向性に自己を評価の対象とする。ヒト個体意識の実態は有機の性質統合態であって、生体一般の性質と本来自己陶冶に機能する本質的評価能力の理性とが、単体に分節化し別々に機能する訳ではない。理性は自己への指向性に発源するから、個体意識の全体性に関わり、分節化して即自機能しようとする生体一般的性質を統合機能せしめる。その運動は個体自体の生体気質エネルギーに拠っているから、実践的には、個体気質運動が理性的に展開するかどうか問われることに成る。直接態欲求充足結果展望の功利の意識から始動する、普遍的欲求対象からの自己を評価対象とする意識は、自己自体への指向機能性を高めて実

在の自分を求め実践しようとする理性欲求を活性化し、内外世界に通底する実在への実感的認知に至る。自己評価意識は実在に即ち本来性に展開していく筈である。

有機の性質複合態である理性体は自覚して自己形成・実現するのを課題とする。課題未達成で達成途上に在るのが実態である。実態には例外があるけれども、実態としてのヒトでは、自分の欲求自体への評価意識は、終始自分であろうとする生物個体原態の即自意識現象による自律神経的気質エネルギーに引っ張られて、自己肯定・正当化へと機能する。生体意識現象は自己保存への同一性において即自に自己肯定態である。自我意識の原型である自意識に機能する自分への意識の実態多数派は、自分への分だけ感覚意識したほゞ即自的な自己肯定態である。実態自我は、自覚を課題にする故に機能する自覚への自己意識に拠って、状況内に肯定態な自分の存在証明を求めている価値の意識である。

即自態エネルギーに引かれて、実態のまゝな自分の肯定的存在証明を求める自己評価意識には、自覚的自己実現の課題を負って状況内に実存する故の自分への意識機能によって、自己肯定に存在証明しようとする為に、自分の即自外向欲求当体において、状況内相関性に結果としての充足が感覚意識される。充足結果への欲求は対象における感覚に因り、時空状況内の同一性に個別対象の共通意義を捉えれば、自分の生体自然な欲求に普遍的充足の保証が得られる、との感覚が展開する。実態自我の功利の意識現象に因って個体は、自分の欲求の充足に何らかの普遍の価値があるから正当であると主張するように成る。拠り所は、普遍の性質であり自己への意識機能である。生体自然の欲求充足を求めて、実態自我は、普遍の性質に自己意識を活性化し理性欲求を活性態とする。自分の欲求自体を普遍の意義に運動せしめようとする、実在の自己実現への欲求が実感と成る。普遍な判断規準に拠って、価値観を自分の生体欲求に運動せしめようとする心性が醸成される。

自我意識は、即自態的自意識の気質エネルギーによって対自態の自己意識を現象して自己同一性を実現している。ヒト実態に即すれば自覚は課題であって未達成である。自己意識は本来自己相対化に始動して自己肯定から自己批判に至る筈だが、実態の自我は、生体本来の即自意識現象に傾斜して自分の直接態欲求運動の自己肯定に留まることが多い。この時、価値観は自己正当化の手段である。自分の欲求充足運動の過程と結果をメタに捉える自己意識活動に拠って直接態欲求が、世界状況内に存在する為の同一性においてこそ運動の実現することを了解すれば、普遍の意義において自己への意識は実在の自己を実践的に求めて理性欲求を活性化する。価値観は実在へと普遍の価値規準を獲得するに至る。

現代実態自我は、個体欲求に輻輳する技術文明と即自態個別人間性に基づく自然権に拠って、生体自然の個別的な欲求充足を人間性の尊厳な意義に自己肯定評価しようとする。

即自態的個別人間性中心主義：欧米近代思想は理性への思想的覚醒に基づき自然法を人間の内面に定位した。一方、内的自然法は、その感覚からは外在する、実は人がそこに内在する、自然法の実在相を疎外しなかったとは言えない。自然法が自分の内外に通底機能しているのに、思想に強化された自然法内在感は、外在自然法を疎んずる心性を生じた。

近代の合理主義精神は、内的自然法に拠って自覚存在の尊厳な主体性を闡明した。しかしどのように解釈・説明しても、ヒトが世界内に実存する生体の一種としての存在者である実相に変化はない。理性で世界の実相を自覚し、天地と並んで認識において世界内存在としてヒトに成るに過ぎない。自覚が機能していない存在者としての事実は天地と並んではいない。理性が自然法としての天賦の能力であることに変わりはない。世界に内外の区別はない。世界内に存在する為の同一性においてでなければ、我々は自分の存在を保障す

ることは出来ない。内的世界感は、生体自然な自己内世界の統合感覚の明証態に過ぎない。その質は即自態的であるのか自覚的であるのか、が不問に付されてはならない。

内的自然法の理念は、自覚による自己の本来性実現を課題とする我々に、内的世界優位感の自覚を喚起した。自覚存在に自覚は課題であって、実現した自覚に拠らなければ自己の本来性は実現しない。我々は常に課題達成途上に在る。自覚的自己実現の途上に在る我々に内的自然法が思想的に提示されると、理性実現の尊厳な課題性よりも、むしろ、その論拠に困って、もともとは直接態である生体自然な自己肯定の内的世界に目覚め、その優位感の方に引き付けられる。即自態に傾斜した内的世界感である自意識の実態は、理性主体な自覚へと向自に自己意識的であるよりも、むしろ即自的な自己肯定態である。実態としての自意識は、内的自然法を、実践的には直接態的自己肯定な内的世界優位感に捉える方に傾斜する。この面から観れば内的自然法は、世界の実相を顕していない、即自態の実態人間中心主義という仮象の形成原理と成った。ヒト生来な自己への意識機能の指向性が直接態感覚をそのまゝに受け取れば、世界が自分から始まる。

即自態の実態人間中心主義は、生体自然で即自的な内的世界の優位性を思想的要請に捉えた。ヒトのものとしての内的世界優位観は、内的自然法の自覚に基づかなければ実在に機能しない。内的自然法の自覚は、世界の運動法則に拠った内的世界の自律運動に実現する。だが、自律精神運動の原理である内的世界優位観は、たやすく生体の種であるヒトの生活意識自体を内的世界の優位感覚に変質せしめる。その優位感覚に自律性は要らないからである。この時、内的世界の主導権は、ヒトの自覚運動の法則から生体内的世界の心理運動の法則へ移行する。即自態的な内的世界優位感とは、即自態の性質において無自覚に、自己保存・拡大の為に外的世界を理解する知的欲求を活性化し、生体一般性の自己実現欲求に拠って技術文明を構築する。知性は、自己の身体状況を含めた外的世界状況を理解するのが本来の機能である。知的能力の属性は即自態の生体一般自己保存本能の機能に在るから、その活性化は、脱精神的自律性の内的世界優位感の強化意識を個体に齎らす。知的欲求の充足を通した、生体一般的個体の自己実現欲求の充足態様がそこに観られる。

直接態自己肯定的な内的世界優位感覚に基づいて拡大される科学・技術文明は、これに対応した内的世界の展開を担保しようとする、ヒト科生体の自己保存欲求運動を加速し、知的能力機能のさらなる活性化を結果した。外的世界は即自態の実態人間中心主義の心性において知性機能の対象と成り、我々が内在し我々に内在する内外通底の自然法は、あたかも仮想の現実であるかの如く近現代化の過程に拡散した感がある。ヒト主体性における主観は、実証的合理性に顕れた客観に拡散・吸収された。知性はヒトの本質ではない。ヒト特質的に機能するに過ぎない。知性がヒトの特性なのではなく知性の機能が特性であり、かつ、それが本質ではない。知性が理性において機能した時、特性はヒト本来性に機能する。知性世界の展開規模は、理性機能の証明態であるとは限らない。一文不通な個体のヒトとしての価値は古来論じられて来た。知性と理性の展開は必ずしも比例しない。

ヒト特性にではなく生体一般性に知性の属性は在る。知的能力は即自態主観と成る。即自態主観は、直接態の共通項に拠って客観世界の存在者と連動して「知」の概念に理性を吸収してしまう。科学的知見の累積と技術文明の急展開の近現代状況は、即自態非自覚的な内的世界優位感と相俟って、知の世界がそのまゝヒトの世界であるかの如き誤認を生ぜしめた。我々の関心事は、自分達の生活保障条件である外的世界と、知的欲求拡大に起因した自己の生体一般的な自己実現欲求との相関の問題に成った。近代合理主義精神は、現

代精神への移行過程で原理を理性から知性に転換していき、内的自然法は、自己の対象世界を実利に運動せしめようとする実態人間の即自態的な個別性中心的自然権に座を明け渡した。自然権の理念は、我々が自覚存在の能力の意義を自覚した時に本来性に機能する。

自然法は世界内存在としての自覚に拠ってヒトに内在化し機能するから、精神運動の自律性が機能低下して心理自体の自律運動に主役の座を明け渡すことになって、自然法を実態としての個別生体人間性中心的自然権に読み替えれば、尊厳性の意義は、生体自然・必然な統合態即自意識現象の一般性に移行せざるを得ない。自覚に基づかない自然権の意識は、直接に生体一般的な自己決定欲求の表現としての、即自な幸福追求権の主張に顕れる。

自然権が生来基本な状況内存在である人間の権利として、自覚的に状況内同一性である相関性の意義に了解され実践され、ば、権利は自然法としての社会的正義において機能し、人間はその行使資格者である。即自意識現象が自己決定欲求に因り幸福追求を自然権に主張すれば、人間中心主義は生物体個別人間性中心主義に機能するように成る。

「価値感」：価値実現は価値観の実現である。現代心性に基づく価値観は、即自に自己肯定な実態多数派の自意識に拠る実利指向を原理とし、近現代状況の進展過程で、知性を契機とした即自意識現象的欲求の拡大実現への指向性を強めた。強化の誘因は技術文明状況と共に、実態人間中心主義に発源する自然権思想であり価値観多様化の名目である。

自覚体に成立する自意識は自覚に拠って機能するのは本来であるが、生体であり自覚を課題とするのが自覚体の実存形態であるから、生体自然性に傾斜して運動するのところに実態相が在る。生体実態である意識現象そのまゝ、即ち即自態に近い実態自意識の主観が価値を決定すれば、生体自然な個別の欲求が価値合理性の根拠となる。多様な価値観の存在を認めなければ、各個の即自的に自己肯定な自意識的欲求充足の行為を正当化する論理は見出せない。自分の実利に適うものを価値とする個別化論理が求められ、その根拠が自然権として主張される。自然権思想は、生体自然・本来の人間性の尊厳な意義を生物体人間性中心主義に置き換えて、実効性を普遍性から離脱した個別価値の論理化に集約した。

近代以降次第に、知的欲求の拡大的展開状況の中で、有機の性質複合態ヒトの生体性即自意識現象的欲求が、自覚性を即自性に読み替えた内的世界優位感に基づく、即自態個別人間性中心主義によって価値規準を決めるように成って来た。生体原態性に拠る、自律神経的気質運動のヒト特性が肥大化した知への関心は、即自態的な個別人間性の解放的实现に価値を意識して、個別の幸福追求権を自然権の意義に合理化しようとする現代心性を醸成した。多様な価値観の主張は、生体自然な個別の実態人間性の直接的性質の自己完結運動自体の妥当性を標榜しようとするものである。自己完結な、即自態自律神経的気質運動を合理化しようとするれば、自己への評価意識は終始自己肯定に機能し、即自な気質運動欲求の指向の性質自体が普遍妥当であることを承認せざるを得ない。理性は評価意識に暗黙知的機能を果たすこともまゝならず、むしろ生体もととの、即自な個別自己肯定態の在り方自体を、普遍性に位置づける役回りを演ずるように成った。

生体原態の個別欲求自体を尊厳性に意義づける為に、即自態的な個別人間性中心主義を執るのは原理の誤りである。生物体一般的な人間性中心の自然権を唱えるならば、理性の機能を復権しなければ辻褄が合わない。内的自然法の本質的評価能力により自己実現を志向して始めて、ヒトは特定生物の種としての本来・自然の個体統合性に自己同一性を実現し、世界内存在と成り、他の種と同列に世界内存在者と成ることが出来る。即自自己肯定態意識現象の生物個体の自己同一な統合性は、世界の運動法則である自然法に内在機能する。

生体一般の系統発生的・遺伝情報的な個体内自然法は自律神経運動であって、自覚のものではない。これら必然不可避であるから尊厳な実在の性質に、ヒトは、自覚・自律に機能する内的自然法に拠らなければ与かることが不可能である。自覚への内的自然法に拠る自律性から離脱した生体一般の自己決定欲求に拠る幸福追求権の主張は、世界の運動法則内に実存することを否定して、仮想の生体である分節化された動物一般性の単体が非状況内存在として解放的に実存することが現実である如き、仮象実態化の試みである。

動物一般性単体という仮想の現実を実態化しようとする心性は、精神自律的な理性の欲求を、自己保存の為に外界理解能力である動物一般の知的能力の欲求に読み替えたところに発源する。肥大化した知の世界に機能する自律神経の運動態知の欲求の自動性に価値観世界の市民権を付与すれば、自覚性から離脱した他の人間性がありのまゝで同等に即自運動態の権利を主張するように成り、評価意識は普遍性を疎外して、ひたすら生体自然な人間性自体の自律運動を自己肯定して、人格的統一性を解体する。

普遍性に拠り所を求めなければ、状況内に相関体として実存する生体ヒトの価値観は自覚体のもとは成らない。自己意識が機能展開する過程で、状況内存在的な同一性においてこそ、自分の生体自然な即自態欲求が実現することを了解すれば、価値規準は普遍性を求めない訳にはいかない。普遍からの意識は、ヒト気質エネルギーに本有内在の理性欲求を刺激して、自覚的に内的世界を活性化する。即自態欲求運動を生体一般性において合理化すれば、人格的にでなければ個体統合性を維持できないヒトを、生体一般種という仮象に実態化して、価値を即自態世界のものにしてしまう。即自態は感覚態そのものである。価値観は自己肯定性を強めて「価値感」に成り、普遍からの意識はありのまゝを自己肯定する為の手段と化し、即自態欲求の個別の絶対値を普遍性に捉えて、即自欲求内在の普遍への指向性を吸収してしまう。評価意識の価値判断は即自欲求の絶対値に規準を置かれて、価値観自体としての存在意義を喪失する。

価値観は普遍からの評価意識によって存在意義を生ずる。内的自然法を疎外して多様な価値観を主張する「価値感」は、仮想の現実である生体一般という種の即自態個別欲求の価値を幸福追求の自然権の名の下に合理化し、相対的であることによって絶対化しようとする。相対的であることによって価値それ自身の内実が問われる責任を回避し、他者ではなく自分の価値であることに因ってその絶対値を個別自己決定・幸福追求欲求の生体一般的尊厳な意義において正当化する。内実に関わらない「価値感」存在自体の絶対化を求める、即自態に傾斜した実態自意識評価規準が機能するように成る。生体意識現象的な主観の世界は、特定個体の直接性によって自己完結しようとする。

この主観世界の構成した「価値感」は、自体を相対化する視座を持たない。相対化の視座がないと言っても、多様な価値観の妥当性に拠り所を求めたのだが、相対化は建前であって、価値観の多様性を便法として自分の「価値感」を自己肯定している。相対化視座がないと言うより、自己完結な視座が自動機能しているから、多様性を手段として自分の価値の正当化を主張する。個別のと言うより自分の価値を自己肯定する為に、普遍の人間性や自然権の思想の意義に依拠したのが実相である。

他者への価値実現期待主義の心性：他者への価値実現期待主義は実態自我の自己主張であり、「価値感」は実態自我が自分の正当性を自分の状況に主張するところに成立する。脱自然法の即自態個別人間性絶対値主義の自然権的现代実態自我は、個別価値の正当性を拠り所として、自分の生体一般という種の人間性の即自意識的自己完結世界の直接の性質を、

自分の状況世界に押し上げようとする意思を表明する。

相対化を手段として普遍性への責任を回避した「価値感」の即自態的自意識は、自己の欲求充足行為自体を普遍性に評価する価値の拠り所を、即自態個別人間性中心主義の現代状況に獲得した如く感覚して、自己完結な直接の性質に基づいて自分の価値を絶対値とする。自分の意思が単なる欲求の事実ではなく、普遍的意義を有するものであるから他者のものでもある、と自己正当化に認知要求するように成る。実態自我の自己主張は他者への価値実現期待に展開する。生体意識現象一般は、終始自分であろうとする自己完結態であると同時に常に即自欲求に自己実現すべく自分の周囲へと向かう。欲求は状況に実現する。内発の普遍への指向性を自己絶対値化した実態自我の「価値感」欲求は、ヒトとしての生来な意識現象の向自機能に拠って、自己を正当化し状況に拡大展開する。

精神の自律性に実現する自己への意識は、自覚・自己陶冶の課題達成の過程に機能する訳だから、個体基盤である即自態欲求の気質エネルギーに引かれて、自己肯定を指向するのは実態として当然である。過程実態が自己肯定されると、気質エネルギーを普遍への指向性に活性化すべき自己意識は、本来の機能を曖昧にし、自己批判の方向を見失いかねない。精神的自律性から理性実現への過程展開は、ヒト本来性の明証態であり、本来性が曖昧になれば個体が感覚意識するか否かに関わりなく自己意識自体に、自動的すなわち暗黙知的に本来態への復帰を促す問題提起の内発するのが自然である。実態と本来態の格差に因って、個体には種としての主体に成りきれない自己疎外的実存への不安が現象する。

自己疎外感の内発は意識下的なものだから、生活状況が自分に輻輳して我々の意識現象を刺激して生体意識現象自然・本来の外向性を強めれば、内への意識は弱まり、不安は無視される。無視されても本来への問題は提起され続けるから、自己肯定態の即自な意識はこれを吸収しようとして却って「価値感」の正当化意識を強化する。そこには、他者に自分の「価値感」を妥当な価値として実現期待している、自分を善意態とする心性形態が成立する。価値実現を他者に期待する自分を善意態に積極正当化する心性は、価値がそのまゝの内実で肯定・正当化される即自な生活実感と、価値実現を期待される他者・対象世界に関する意識とが分離した状態に成る。

このような心性が主観に成立すると、自覚を課題とする理性体としての煩わしさからの解放感に囚われる。この生活実感的解放感においては、実態自我の自己完結な直接性の欲求を否定的に肯定して、自分の関係性に集約される普遍の意義に本来の自己を実現する、という自己課題は他者が実現するものと成り、価値実現は他者への要求に強化される。「価値感」拡大的实现欲求の気質エネルギー指向性展開の視野には、対象世界の実存相における、必然な状況内関係存在である他者の在り方に関する客観的認識が形成されもする。もともと、存在者が状況内に実存し関係性においてこそ自己の直接性が実現することは、自己意識性に因って意識下的に直観されている。この直観の認知は、他者への期待としての倫理的認識を形成する。

他者への期待である倫理的人間観の認識は当人の生活実感を疎外しているから、ヒトを純粋と言うより単体の理性実践体と見做しがちである。理性は現実態でなければならない、ヒトのものとしての当為は、当然に実践されなければならないことと成る。実感と認識の分離した心性が社会的に影響力の在る立場に置かれることが多く成ると、価値は他律的实现の問題となり、ヒトの主体性は疎外される。理性が実践態として実在の自己実現に向かわず、単なる客観的認識に留まることの実体疎外感、現代状況の中に拡散している。

日本社会の学校化過程：近代国家の国民教育制度の整備による学校の体制化が人々の自己形成への経験獲得行為の主体性を疎外して来た、という認識は一般化されつつあるが、弊害を除去する程には実践的動力を持っていない。他者への価値実現期待心性の成立には、近代以降の学校化過程が時代状況としての契機である。

学校が体制化される過程で教育は、個体の自立に不可避な経験獲得の生活行為の意義を曖昧にして来た。生活自立に不可欠な学習行為が教育の主導権の下で為されるのが当然視されて受動態と成り、「人間形成」は他者形成を意味するように成って、「人間は教育によってのみ人間になる」という著名哲学者の言説が、この意味で当たり前のように受け入れられている。自覚存在の尊厳な主体的行為は、科学的発達観や自然権の子ども観の影響もあって実現し難い。科学的発達観はヒトの発達を客観に捉え初期段階を未熟と観て、学習への自覚動機の低年齢者おける成立を困難視する。これに併せて、自然権の子ども観は子どもと大人を異質に捉え、年齢に関わらぬ自覚生体普遍の実践理性を軽視する。

自覚を達成課題の実感に捉えれば、当然、自他ともに理性を本質とする種に生まれた自然法の内在感が具体化する。自覚を課題と観ればその可能性の重視に至る。可能態であろうと完成態であろうと、自覚するという性質に変わりはない。如何に未熟であろうと自覚の性質が観られなければ可能態でもない。理性を主観に捉え実践理性にヒト主体であろうとすれば、自覚の未熟・完成の区分けなど軽々に出来る訳がない。成人・社会的地位は自覚の完成度の高さを示すとは限らない。他人事になると、自覚の質の完成段階をあたかも数値化表示するが如き発想が生じて自覚を表面の現象とする。内面性の質の実感を対象化しきるのが困難であることは、主体の側に居なければ十分に了解されない。

日本社会の近代学校化過程で、ヒトの自然法である自覚動機に拠る自立への自己形成生活行為の主体性が疎外されていった過程事相を象徴するのは、近代最初の学校法令「学制」の標題と理念を述べた前文の内容、これに影響を及ぼした福沢諭吉『学問のすゝめ』の標題と「初編」内容である。明治初頭は人々の生活心性は未だ学校体制化の影響下になく、江戸期的状況を引き継いでいるところがあった。自立への学習行為を「学問」と称するのが一般的であったと観られる。対象世界の体系的認識形成行為をも学問と称したが「学問」も十分に市民権を持っていた。

「学制」は確かに学校法令だが、『学問のすゝめ』『初編』内容を受けたとされる「学制前文」には、「教育」の語が一つも使われていない。「学問」「学」で取り仕切っている。「前文」の意義に沿って捉えれば「学制」は、「教育所」ではなく「学問所」の法令であって、「学問」は一般的な必須の生活形成行為としての学習の意である。福沢は一般人の学習行為意識に訴える目的で『学問のすゝめ』の標題を採ったと思われる。旧来の形式に新しい内容が「初編」の主旨であった。「学制」実施の主眼は小学校体制の普及にあった。「初編」「前文」とともに学習行為者に直接語り掛ける姿勢が基本であり、学習行為の新時代的意義を訴え、自覚動機を問うている。低年齢者も十分に視野に入っている。「学制」付帯の「小学校教育則」では『学問のすゝめ』（「初編」）が教科書として例示されてもいる。

現代心性からすれば、これらは当然に教育問題であり、教育を受けさせる立場の者同士の扱う事柄である。その視座からは、学習者は教育の対象であり教育的期待価値を実現させられる当事者であるが、学習への意志を語り合う主体ではない。学校は「教育所」である。学習意志は、教育的善意の期待価値に包含されているのが前提のようだが、実は全くと言って良いほど問われていない。学習への動機づけは現代教育論の一契機だが、教育過

程の局面要素に過ぎず、生体即自意識現象である知的欲求の自動・内発な展開促進の問題に限られている観がある。

百数十年前の旧時代に普通であった「学問」心性は教育心性に変質してきた。理性体の尊厳な主体性を保障する不可避な生活行為への自覚動機が問われない一方で、教育を受けさせる側の教育的期待価値を実現させようとする心性は肥大化し、その心理的自律運動の影響は学校化社会の中に浸透している。何らかの社会的地位にある者は他者に価値実現を期待するのが当然であるかの如き意識を現象するなど、期待価値実現主義心性を一般化している。事態の中に在る我々には自覚存在の本質に関わる問題である事の理解が難しい。

おわりに：近代から現代への精神原理の転換、科学技術文明の急拡大、近代国家による学校化社会、これら諸要因の重層化状況が生体本来の即自意識現象欲求の自己肯定・正当化意識を増幅して個別価値を絶対値とし、他者への価値実現期待主義心性を現代的に形成した。この心性状況の中で、実践理性実現が主体的課題であることの煩わしさと並行した自己存在の実感、生体一般性的人間性中心主義の感覚によって疎外された。現代心性の指向性は、理性が実践性に機能せず単なる客観的認識の機能に留まることの空疎感と自己存在感欠如への不安を、我々に輻輳する技術文明状況に拡散せしめて、理性体必然な精神の自律性の自然法からの解放感に拠って、即自態的な人間中心主義現実感を求めている。

事態の実相が闡明されなければ、ヒト本来の実践理性復権の拠り所が得られない。